

トークイベント

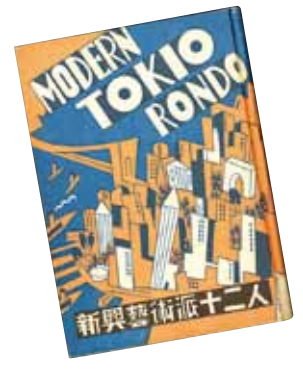
「白壁の文士たち」

11月3日(土)午前11時〜12時

公開講座パネラー：シユライバー 絲子さん(久野豊彦の娘)、嶋田厚さん(久野豊彦の研究者)、河合恒人さん(久野豊彦の教え子)、成田哲也さん(久野豊彦のお知り合い)、竹内武司さん(久野豊彦のお知り合い)

はじめに三田村氏より、久野豊彦の概略が説明される。川端康成や吉行エイスケらと共に昭和初期にモダンリズム文学を起こし、新興芸術派と呼ばれたこと。明治29年、西区伝馬町(現・中区錦)で生まれ、白壁の、現在、料亭「か茂免」の前の敷地数千坪のお屋敷で育ち、愛知一中から慶応義塾に入学したこと。遊び？歩いていた時にカフェの女給をしていた絲子さんのお母さんと知り合い結婚されたこと。

そして娘の絲子さんが、「私が派生したので、父は母と結婚しました。父は常識人ではなく、いつも幻想の世界に生きていました」と話され、その軽妙な語



『モダン・TOKIO円舞曲』 振興芸術派十二人 表紙

り口が思わず笑いを誘った。また、格式高い久野家から結婚にはかなり反対されたとか。

次に、研究者として嶋田厚さんから、久野豊彦の文学の魅力を次のようにお話いただいた。



久野豊彦 大野町(知多)にて昭和30年頃(写真は成田哲也氏より)

「アバンギャルドな世界を文学として表現したのは、当時、久野豊彦と吉行エイスケぐらいだったのが、吉行エイスケは早死にし、久野豊彦は、いつのまにか文壇から消えてしまった。当時、文壇の合評会で、すぐくおもしろいが、日本で一番わからないと言われた作家で、誰もおもしろさを解説できなかった。一言で言えば、初めてピカソを見た、という感じでそれまでとは違う小説の世界であることに尽きる。」この他にも貴重なお話を聞かせていただいた。興味のある方は、「ブロッケン山の妖魔」(嶋田厚編・工作舎)を読まれることをお薦めします。

文化のみち二葉館 上中満喜

文化のみち物語 その六 久野豊彦の思い出の中の白壁界限

今回は、モダンリズム文学の旗手、久野豊彦が幼少年期を過ごした町を描いた『思い出は雲に似て』白壁町二丁目を紹介したい。自伝的ラジオドラマの第1回目台本として書かれたもので、昭和30年6月14日に放送された。

この物語は、日本の津々浦々の町や村からランプの姿が消えて、瓦斯灯になり、やがて瓦斯管が地を潜って、台所に、便利な火の花をひらいて、人々をよるこぼせたころのことである。

いまでは、もう跡かたもなく消え失せてしまったが、戦前には、あけくれ、名古屋の北の空には、幻のような古るい(原文ママ)お城が浮かんでいた。波の色みたいな、緑青のふきでた屋根瓦のてっぺんには、左右両端、雄雌二尾の金の鱗が金網の中に、とらわれの身を、かこちながら、ひかつと怪しい光を放って逆立ちをしていた。

(中略) 長堀町、白壁町、主税町、榎木町、片端町、善光寺通、鳥屋筋など、碁盤縞をなして、東の方え流れ



昔はここに幼年学校があつて、軍人の卵がうようよとしていた。

私たち一群の少年は、この白壁町二丁目に巣喰つていた。私の、あばら屋敷の真向いには、舞踏家になった伊藤道郎が、東京からここへ(原文ママ)来て、名古屋中学を通つていた。

筋向いには、安藤の不気味な屋敷があつて、安藤は、やがて、中学をでるころ父親が屋敷を、紙問屋の中井さんに譲つたので一家をあげて京都の花園村に居を移した。いまでも、安藤は、祇園の舞妓好みの半襟の図案を一



手に引き受けて、工夫をこらしているが、この人手に渡つた、そのころの安藤の屋敷は、老樹巨木が、天空にそびえ、天日をおおい、ために、庭園は、見渡す限り、青苔の庭と化して、この青い色のなかに点在する、うづくまつたようなドウダンの老木が小粋な白い白い提灯のような花をびっしり、真白につけているので、あたりは、ひとしおただらぬ妖気が、ただようのであった。

(中略)

三丁目にも鴉盟荘(原文ママ)という料亭がある。ここは、近藤友右衛門さんの屋敷で、先代は、日本建築、わけても茶室に深い趣味を持っていた。ぜいをつくし、精魂をこらし、やつと丹精をした茶室が出来ると、もう、その翌日から、取りこわしにかかる。近藤さんの高雅な趣味は、ちやち

文化のみち二葉館周辺は、文人たちを輩出した地域でもあります。江戸時代、『鸚鵡籠中記』を記した朝日文左衛門、名古屋のモダンリズム詩をリードする詩人、春山行夫の住んでいた主税町には愛知教会があり、大正期には詩人佐藤英・井口蓮花や文化人小林橋川・市川房枝の集う場となりました。



- 1 久野豊彦 作家 住まい \*鳥屋筋交差点西北角
2 春山行夫 詩人 生家
3 福永令三 児童文学者 生家 \*旧川上貞奴邸東
4 石田元季 国文学者 帝国学士院賞 住まい \*清水口北東
5 文会書庫跡 江戸時代の図書館 \*豊田利三郎邸東
6 朝日文左衛門 『鸚鵡籠中記』作者 住まい \* (現・主税庵)
7 渡辺霞亭 作家 生家
8 愛知教会 文化人サロン (小林橋川・市川房枝など) \* (現・主税町公園)
9 牧野吉晴 作家 生家 \*子細不明
10 佐藤一英 詩人 住まい (T14年頃) \*高岳院近く
11 高木斐瑾雄 詩人 生家 \*大津橋「伊勢久」
12 現・文化のみち二葉館 (旧川上貞奴邸)
13 川上貞奴邸 (当時) は当時の市電

な使用価値になぞ、目もくれないのである。建ててはこわしこわしては建てて限りもない 美の追求に深いよろこびをおぼえていたのであらう。それは文句なしに偉大なことであつた。それに、それは、ただに、茶室ばかりではなかつた。畳建具の美にまで、粋をこらした異風のもので、畳の形が亀の甲になつたり、三

角形をしていたり、ピカソにも似た、目も見張るばかり創意にみちたもので、近藤さんは、ここでも伝承の規格を敢然と粉碎してしまつていた。

(後略) 写真 土尾張久野家屋敷門(久野豊彦住居) 森眞現著『久野山 清安寺墓地より』 下・現在の白壁町筋、奥に旧櫻門の門が見える

書庫様から

「紫のゆかり」

「たまかぎるほのかに恋は始まらむ 少年となりたまふ師上」。昨年の夏、私の好きな歌人である水原紫苑の講演を聞く機会があつた。その時にサインをお願いしたところ、この歌が添えられていた。

今から四年ほど前、「観音くわんおん」の題名にひきつけられて手にした歌集には、独自の感性で詠まれた三十一文字がならんでいて驚かされた。その歌人水原紫苑のプロフィールには、「春日井建に師事する」と記されていたが、歌を詠まない私には名前すら知らない、遠い存在であつた。

ところが、それから間もなく文学ボランティアの募集があり、不思議な縁に導かれるように春日井建の蔵書整理に携わるようになった。そこでさまざまな分野の蔵書に触れたり、市民ギャラリー矢田で開催された「春日井建の軌跡」を見たことなどから、私と春

紫のゆかり」 文学ボランティア 佐藤久美

今年も書庫でどんなめぐりあいがあるか楽しみである。